

自分を見つめ直して



小高中学校 三年

片岡紗徠



バイアスとアンコンシヤスバイアス。これはどちらも偏見という言葉ですが、意味が少し違います。バイアスまたは偏見とは、かたよった見方。考え方、客観的な根拠なしに人や集団を判断することです。アンコンシヤスバイアスは無意識の偏見ともいい、自分自身が気づかずに持つ偏った見方、考え方のことです。そしてこのアンコンシヤスバイアスは近年、世界的に注目されているのです。

アンコンシヤスバイアスは日常的にあるもので、私たちが生きていく上で必要なものでもあります。例えば、血液型の占いから性格を想像したり、「常識」や「当たり前」などの言葉をよく使ってしまうこと、初対面の人と話すとき相手の外見や出身地を基に「この人は優しそうだな」や「こ

んなものが好きそうだな」とイメージしてコミュニケーションを取ったり、アンコンシヤスバイアスを持っていることで、「この場所は危険な感じがする」など自己防衛や危機回避をすることもできます。

このようにアンコンシヤスバイアスは誰にでもあり、それ自体が問題なのではなく、自分のアンコンシヤスバイアスに気づこうとしないことに問題があります。しかし、アンコンシヤスバイアスは無意識であるため、なかなか自分では気づきにくいものです。そしてそれが、「決めつけ」や「押しつけ」の言動になって現れてしまいます。また、相手と解釈のずれが生じ、相手を不快にさせたり、人間関係に亀裂がはいったりしてしまいます。

アンコンシヤスバイアスは誰もが持ち、そしてなくすことはできません。しかし、アンコンシヤスバイアスの影響を抑えることはできます。それに必要なことはアンコンシヤスバイアスによる言動に気がつくこと、気づこうとすることです。「私は偏見の目で見えていない」「私は大丈夫」と思うのではなく、「自分にもこんな思い込みがあるかもしれない」をじっくり考え、自分が偏見の目を持っていることを認めることやアンコンシヤスバイアスを意識して適切な行動を取ることが大切だと私は考えます。

これは私が小学生の時のことです。私は目が悪かったのですが、眼鏡を作っている途中だったので眼鏡をかけていませんでした。その時の席は一番後ろの席。私は、目が悪いと言っても、黒板の字はまだ見えていたので授業に支障はありませんでした。ですが、気を遣ってくれた担任の先生は、私は「大丈夫だ」と言ったのですが、「目が悪くて本当に見えているのか心配だから」と席を前の方に移動してくれました。

これは私は「目が悪いから黒板の字が見えていない」というアンコンシヤスバイアスが働いた例と言えるでしょう。皆さんも無意識に、これは「これはこうだ」と思い込んでしまっていることはありませんか。

自分の考えに自信を持つことは良いことだと思います。しかし、思いやりや気遣いによる言葉でも、それを過信して押しつけてしまうと自己満足になってしまい、相手から嫌がられてしまうこともあるでしょう。そうやってしまうとせっかくの心遣いが、良くないことになってしまいます。このようなすれ違いを防ぐためにも、最初から決めつけずに確認してみることや、自分の発言が相手の心を傷つけていないか考える事が大切です。日常的に起こり得ることだからこそ、皆さんにも自分と一度向き合ってみてほしいと思います。

